

平成25年度 県小教研学習指導改善調査【結果分析】第4学年国語

1 調査結果の分析

(1) 資料選択について(①～⑦)

ア 資料を読み取る力・・・(①～④)

①の正答率は70.1%、②は60.4%であった。誤答の傾向は二つあった。一つは、「アスレチック広場」と「森のさん歩道」を反対に答えているものである。これは、問われているのが《グループでの話し合い》に入る言葉であるにもかかわらず、**1**の問い一のすぐ隣にある《田中さんが書いたしょうかい文》に書かれている順序で答えてしまうケースである。もう一つの傾向は、②に「森林公園」と答えているケースである。「森林公園は、植物や生き物などのしぜんがたくさんあることが、一番のよさだと思うからです。」という石川さんの発言が「森のさん歩道」という取材メモをもとにした内容であることに注意せず、上記の下線部のような一部の言葉だけに着目して答えていると考えられる。

③の正答率はどちらも65.0%、④の正答率は64.8%とやや低めである。記号で答える問いであるにもかかわらず記号で答えていなかったり、メモの中の一部の言葉(「小川」「遊具」など)を記述したりするケースが目立った。

①～④全体として、何が問われているのかに注意して読み取ったり、【取材メモ】と【組み立て表】と【紹介文】を関連付けて読み取ったりする力が十分でないと考えられる。複数の資料や文章などを関連付け、多角的に読み取る活動を、国語の時間だけでなく他教科でも行っていく必要がある。

イ 話題に沿って必要な事柄を選択する力・・・(⑤⑥)

⑤の正答率は54.6%と、資料選択領域の中では最も低い数値を示した。誤答率も43.2%と、国語の調査問題の中で最も高かった。誤答の傾向は三つあった。一つ目は、「紹介文の話題と合っていない」ということが分かっていないものである。これは、紹介文と必要な取材メモとの関係がつかめていないためと考えられる。二つ目は、「森林公園のしぜんを楽しめる場所」という紹介文の内容に触れていないなど、メモを使わない理由を適切な言葉で書けないものである。三つ目は、文末の「からです。」につながる記述になっていないものである。全体して、「森林公園の自然を楽しめる場所」という話題の中心を意識しながら理由を考えて記述することに弱さが見られた。

⑥の正答率は、76.4%と、資料選択領域の中では最も高かった。自分が選んだ内容に合ったメモを選択する力は付いてきていると考えられる。

(2) 記述問題について(⑦～⑩)

ア 全体の構成を考えて記述する力・・・(⑦)

⑦の正答率は63.0%であった。**2**の問い一で選んだ内容と違うことを書いていたために誤答となっているケースが目立った。また、《田中さんが書いたしょうかい文》の通りに書いてしまっているケースも見られた。「まとめ」の内容は、「はじめ」の部分(選んだ話題)と対応して書くということを作文の際に意識して指導していかなければならない。

イ 時間内に指定された文字数で文章を記述する力・・・(⑧)

正答率は80.1%と国語の調査問題の中で最も高かった。昨年度の正答率も81.5%と高く、引き続いてのよい結果となった。⑥の資料選択ができていれば、指定された字数で記述することは、それほど難しくないと考えられる。メモと作文とを関連させる指導を続けていくことが大切である。一方で字数の足りなかった児童、全く書けなかった児童への対応を引き続き検討する必要がある。

ウ 段落を意識して記述する力・・・(⑨)

正答率は60.4%であった。「はじめ」、「なか(二つ)」、「おわり」の三部構成を意識して書くことができない児童が多い。「はじめ」の段落は意識できているが、「なか」「おわり」の段落を意識していない傾向が強い。それぞれの段落の書き出しの一字下げができていないため誤答となったケースも目立った。「はじめ」の段落で紹介する内容をきちんととらえた記述をしている児童は、その後の段落構成もしっかりとしていた。また、「まず・次に」「一つ目・二つ目」など、順序を表す言葉を使う児童は、段落を意識して書く傾向が見られた。

エ 資料を活用して書く力・・・(⑩)

正答率は52.6%と国語の調査問題の中で最も低かった。誤答では、選択した⑥のメモ以外のものも使って書いている、メモと関係のない内容を勝手に書いている、問題文を理解できず田中さんの組み立て表の内容を書いている、田中さんの紹介文をそのまま書き写している、などの傾向が見られた。まず、「問題文をしっかりと読み、自分が選択したメモを使って、組み立て表に沿って書く」という構えが必要である。また、ウの「段落を意識して記述する力」と関連してくるが、自分が何の話題で文章を書くのかという「はじめ」の段落意識をしっかりと持つことが大切である。ここで書く内容をはっきりさせておかないと、「なか」の段落で資料を活用した記述が十分でなくなる傾向があると考えられる。

2 今後、重点的に指導してほしい活動

(1) 国語の学習で

- 段落のまとめりやつながりを意識しながら、説明的文章を読んだり書いたりすること。
- メモを取ったり、目的に応じてメモを取捨選択したりすること。
- メモや資料をもとに組み立て表を作り、それに沿って「はじめ」、「なか」、「おわり」の三部構成を意識して文章を書くこと。

(2) 他教科や総合的な学習の時間で

- 朝や帰りの会のスピーチなどを利用し、まとめりを意識して話すこと。
- 取材・見学・観察メモや収集した資料をもとに考え、文章を書き、発表すること。
- 日記や行事作文等、書く活動をこまめに取り入れること。

平成25年度 県小教研学習指導改善調査【結果分析】第5学年国語

1 調査結果の分析

(1) 資料選択について(①～③)

ア 叙述を関連付けて読み取る力・・・(①)

①は、はじめの発言の叙述と関連付けて、次の発言の考えの立場を読み取る問題である。93.0%と大変高い正答率であった。はじめの発言は、資料1の人数(数値)の多さから活動を肯定的に捉えている。次の発言では、これを受け、資料2のあいさつ運動の感想や自分の経験からその考えを補強している。どちらも同じ立場であることは、容易に読み取れたようだ。

イ 本文と資料を関連付けて読み取る力・・・(②)

②は、資料にある数値から『はっきりした声であいさつする』は、まだできていない」という考えの根拠になる問題点を見つけ、数値を入れてそれを記述する問題である。正答率は32.1%と大変低い。誤答の要因はおおよそ次の2つである。

▲ 数値の意味を解釈し、問題点を見付けることができない。

全体の傾向はつかめても、部分の問題点に着目できない。合計に着目し「はっきりあいさつした人は415人、自分から進んであいさつできた人は455人で、はっきりしたあいさつができた人が少ない」などと記述していた。

▲ 数値を入れて記述することのよさが意識化されていない。

「その人数を入れて書きましょう」という解答の条件を、よく読まずに答えてしまっている。数値を入れて記述することで、具体性や説得力が増すという指導をさらに徹底し、意識付けていかなければならないだろう。

ウ 叙述を整理して、本文の内容を読み取る力・・・(③)

正答率は③-1 82.3%③-2 78.2%で高い数値であった。話し合いの参加者が意見を述べる前に「わたしはA案に賛成です。」などと自分の立場をはっきりさせているため、誰の発言にA案、B案の問題点が存するかがわかりやすく、司会者がA案・B案の話し合いを分けて進めているため、長文を読むことが苦手な児童でも、誰の発言がどちらの立場であるかを読み取ることは容易であった。誤答として、各案のよい点を記述しているもの、事実のみの記述で問題点が挙げられていないもの、話し合いの内容ではなく自分の経験から問題点をとらえてしまっているものがあつた。

(2) 記述問題について(④～⑨)

④～⑨は、読み取ったことを基にして、自分の考えを論理的に記述する問題である。指定された文字数に達しないと④が誤答、⑤以下がすべて無答となる。

ア 制限時間内に指定された文字数で記述する力・・・(④)

④は、指定された文字数以上で文章を書こうとする学習意欲と実際にどのくらい書けるかという技能をみとることができる設問である。正答率は89.4%。昨年度4学年時の同項目が81.5%、昨年度の5学年が81.0%であったことから考えると、90%に近い正答率は高い水準であると言える。書く内容が明確であれば、指定された文字数である程度の分量を記述する力は高まっていると言えそうである。

今後は、書く内容を収集、選択する事前の指導の充実とともに、書くことに抵抗感があると考えられる字数の足りない児童(誤答9.5%)、全く書けなかった児童(無答1.1%)への指導の方策を改善していかなければならない。

イ 段落を構成する力・・・(⑤)

正答率は66.1%で、記述問題の設問中最も低い結果となった。誤答の傾向として、次のことが挙げられる。

基本的な事柄では、段落のはじめで1字下げをしていない、改行をせず書き連ねてしまうというものである。段落指導の基礎的・基本的な事項であることから確実な指導が望まれる。

段落を構成する力の核となる事柄では、「始め、中、終わり」の三部構成ができていない、段落分けはしているが、例示を見ていないために適切な箇所で改行されていない、三部構成にはなっているが、「中」の段落を複数の形式段落で構成できていないなどの誤答があつた。さらに、詳細な書き方の指定があつたため、全ての条件を満たすことが難しか

ったという指摘もある。文章を記述する上で基本となる「始め、中、終わり」の三部構成とともに、段落が意味のまとまりごとに作られていることへの意識付けや意味段落と形式段落の違いなどの指導を充実していく必要がある。

ウ 自分の立場を明確にして記述する力・・・(⑥)

正答率は、91.3 %で、記述問題の設問中最も高い。自分の立場を明確にして記述する力を身につけている児童が多いと言える。A案とB案の二者択一で、どちらを選んでも誤答ではないため、第一段落に自分の立場を明確に記述することができたようだ。

エ 理由を明確にして記述する力・・・(⑦)

正答率は 76.1 %であった。自分の意見と整合させて理由を2つ述べるという筋道を立てて考える力が求められる問題で、例年、正答率が低い。今年度は、比較的よくできていたと言える。誤答では、自分の賛成する案との整合性に欠ける理由を記述しているものが多かった。中には、選んでいない案の問題点を賛成の理由としているものもあった。

取り出した情報を整理し、それを使って理由付けをする思考力、自分の主張にあった情報を収集し、分類・整理する情報活用能力、それを論理的に記述する表現力育成のためのさらなる指導が必要である。

オ 理由に説得力をもたせて記述する力・・・(⑧)

正答率は 68.8 %であった。無答率が 10.9 %と全設問中一番高かった。この問題では、説得力をもたせるために自分の体験や予想などを加えなければならないのだが、体験や予想ではなく、自分の考えを書くことに終始してしまう、体験や予想なのか、考えなのか、判断が付きかねる記述をしているなどの誤答があった。また、自分の考えにかかわりのある体験が思い浮かばない(体験不足)ために無答率が高くなったようだ。

ある考えの根拠となる体験にはどんなものがあるか考えを出し合わせるとともに、体験や予想を記述する際の書きぶりなどについてさらに指導を充実する必要がある。

カ とらえた問題点について、自分の考えを記述する力・・・(⑨)

正答率は 66.8 %で、低い数値であった。自分と異なる立場の問題点を指摘することはできても、自分が賛成する立場の問題点や解決方法を見付けることは、児童には難しい。正答率があまり低い要因であると考えられる。

誤答では、解決策は考えられても、記述内容がわかりにくかったり整合性にかけたりするため読み手に伝わらない、出題意図を理解できず、自分と異なる立場の問題点を考えてしまうなどがあった。

物事を多面的にとらえ、メリット、デメリットの両面から考える機会を設定するとともに、自分の考えについて予想される反論を想定し解決策を述べることで説得力が増すことが実感できる取り上げ指導を工夫することも考えられる。

①以降の問題から見える共通の課題として、主張と根拠の整合をいかに図らせるかということがある。国語科のみならず、他教科等も含め指導を継続していく必要がある。

2 今後、重点的に指導してほしい活動

(1) 国語科の学習で

- 資料から自分に必要な情報を収集し、分類・整理して、自分の考えを明確にすること。
- 意見文の基本的な構成や文末表現を模倣しながら、自分の考えを的確に記述すること。
- 書くことの抵抗を少なくするために、条件を工夫して、書く活動を設定すること。
- 普段から原稿表紙の表記のきまりを意識し、原稿用紙（またはマス目のあるノート）を用いて書くこと。
- 段落意識を明確にして、段落と全体との関連をとらえながら文章の要旨を把握すること。

(2) 他教科や総合的な学習の時間で

- 図や表、写真などの非連続型テキストから、情報を取り出し、分類・整理すること。
- 物事を多面的にとらえたり、自他の考えを比較して共通点や相違点に着目したりしながら、考えのよい点、改善が必要な点等を考えること。

平成 25 年度 県小教研学習指導改善調査【結果分析】第 6 学年国語

1 調査結果の分析

(1) 資料分析について (①～③)

ア 資料を読み取る力・・・(①②③)

①の、資料を読み取り、正確に情報を取り出して会話文に当てはめる設問の正答率は 78.0%であった。「資料イを見てください。」という直前の言葉から、資料イに着目して正しく情報を取り出すことができている。しかし、会話文の穴埋め箇所前後の文脈を正しく読み取り、どのような言葉を資料から取り出せばよいのか考えながら資料を読み取ることができないことによる誤答も見られた。

②の、「この数」が示す内容を問う設問の正答率は 83.9%であった。『『きれい』と答えた人が 24 人もいることになります。ぼくは、この数は多いと思います。』という表現に気付き、正しく読み取ることができている。誤答としては、問題文を正しく読まず、○を付けるべきところに数値を記入してしまうものが多かった。また、「この数」の「この」が何を指すのか理解できず、解答に結び付かなかったケースも見られた。

③の、地産地消というこの問題のキーワードにかかわる言葉の抜き取りは、95.1%と高い正答率であった。

①～③の設問を通し、狭い範囲の文章の中から情報を取り出す力は身に付いていると考えられる。しかし、表や図、文章とそれらの組み合わせなど、非連続型テキストを含む複雑な資料から、必要な情報を取り出す力は十分とは言えない。(2)の記述問題の解答にもつながるが、様々な資料を読み取る学習経験を積ませる必要がある。

(2) 記述問題について (④～⑦)

ア 制限時間内に指定された文字数で記述する力・・・(④)

正答率は 90.0%と高い。多くの情報量がある問題文や資料を自分なりに読み取り、時間内に指定された文字数を書きあげる力が付いている。無答は 2.6%であり、ほとんどの児童は何とかして記述しようとしている。今後も、決められた時間内に決められた文字数を書く学習を積み重ねていくことで、この力をより高めていけると考えられる。

イ 段落を構成する力・・・(⑤)

正答率が 71.7%であり、昨年度の正答率と比較すると約 11%伸びた。問題が違うので一概に力が伸びているとは判断できないが、「始め、中①、中②、終わり」という条件に合わせて自分の文章を構成する力がある程度身に付いているととらえることができる。日頃の作文指導の成果であろう。

しかし、依然として 19.9%の児童が指定された段落構成で文章が書けず(誤答)、段落が全くない文章を書く児童も 8.3%存在する(無答)。まずは、「始め、中、終わり」という三部構成の文章の書き方に慣れること、そして、必要に応じて一段落に一事項となるように、中をいくつかに分ける力を伸ばすことが必要である。

ウ 根拠を生かして記述する力・・・(⑥)

正答率 47.1%と、非常に低い数値を示している。この設問では、資料をもとに、自分の体験、知識のいずれかを入れて、考えなどを詳しく説明する力が問われている。29.8%の誤答の多くは、選んだ資料と自分の考えに整合性がないものである。自分の考えを主張するためにどんな内容の資料を活用すればよいのかという、資料選択・活用の力が十分ではない。

また、資料の内容に関連する自分の体験や知識を入れるという条件に合わない記述(選んだ資料の文章をそのまま書き写してしまう)も多く見られた。本調査の採点基準では、これらの記述は無答となるため、無答率は 23.1%と高い。

適切な資料活用のためには、資料を正しく読み取る力も問われる。その資料が示しているのはどういうことなのか、自分の主張とどうかかわるのかについて丁寧に指導しながら、資料を活用する力を高める必要がある。

エ 効果的に記述する力・・・(⑦)

正答率 43.6%と、本調査の中で最も低い。この設問は、資料から数値を正しく読み取り、自分の考えや意見を加える力が問われている。

この設問では、「数値の記述がない」という、無答と判定される書き方が多かった。そのため、無答 30.7%と、誤答の 25.7%を上回っている。数値を読み取り、そこから導き出された自分の考えだけを記述してしまうのである。資料を活用する際、資料中の数値を改めて自分の文章中に引用し、そこに自分の考えを付け加えるという書き方を指導する必要がある。

また、数値は客観的なデータであるため、単に数値を列挙しただけでは読む人によってとらえ方は様々になる。自分の主張に説得力をもたせるためには、その数値を自分は どう解釈したかという理由付けが大切になる。資料の数値を活用し、説得力のある文章を書く力を伸ばすためにも、理由付けに力を入れた指導をする必要がある。

2 今後、重点的に指導してほしい活動

(1) 国語科の学習で

説得力のある主張をするために、ポイントを絞って指導する。

- 事実をもとに、理由付けをして主張を作り上げる力を高める

主張に説得力をもたせるためには、数値等の客観的な事実と、それをどう解釈したかという理由付けを示すことが必要である。話したり、書いたりする活動では、「事実」「理由付け」「主張」をセットにして表現するよう、意識した指導を繰り返すことが大切である。

- 段落構成の力を高める。

主張により説得力をもたせるために、双括型の主張表現を身に付けさせたい。そのために構成メモを活用し、表現活動に入る前に十分な指導をする必要がある。

- 推敲して論旨を確かめる力を高める。

今回のような調査では十分な推敲時間は取れないが、普段の授業では、書いた後或いは途中で、論旨の乱れや段落構成等について見直す時間を設定したい。

(2) 他の教科や総合的な学習の時間で

- 非連続型テキストから、どんなことが分かるかを判断し、自分の考えをもつ活動を重視する。「事実→解釈(理由付け)→主張」という流れは、どの教科、活動でも活用できる。特に、数値等を多く扱う、算数科、理科、社会科での指導を充実させたい。